

## ベトナムに渡航歴を有する日本海裂頭条虫症の一例

◎長録 莉沙子<sup>1)</sup>、蒲田 真湖<sup>1)</sup>、小山 賢<sup>1)</sup>、松村 隆弘<sup>2)</sup>  
京都桂病院検査科<sup>1)</sup>、北陸大学医療保健学部医療技術学科<sup>2)</sup>

## 【はじめに】

条虫感染症は国内では感染頻度の減少した寄生虫感染症となっているが、国際的な人流の増加により再興感染症としての注目が必要である。虫卵・虫体検査依頼件数は減少しているが依然として検査の意義は高いといえる。

## 【概要】

50代男性。20XX年3月中旬にベトナムへ5日間渡航。4月末、排便時に白い紐状のもの(2m程度)を自己排出した。初診時、生化学検査や血液検査、CTに明らかな異常はなかったが、腹部超音波検査にて回腸内腔に再現性のある線状高エコー像を認め、虫体の可能性が示唆された。直接薄層塗抹法とMGL法で糞便検査を実施した。双方の検査法で大きさ約60×45μmで一端に小突起のある淡黄褐色調の虫卵が確認でき、虫体の残存が証明された。

## 【経過】

プラジカンテルによる治療を実施。長さ約9.5mの虫体を排出した。虫体を生理食塩水中に浮かべ超音波で観察した結果、回腸内で観察された高エコー像と極めて類似した

虫体の画像所見が確認できた。また、遺伝子検査によりこの虫体が日本海裂頭条虫であることが判明した。

## 【考察】

本症例の感染経路は不明であるが、成虫になるまでの期間を考えると、ベトナム渡航中に感染した可能性も考慮すべきであった。国際的な人流の増加と食文化の多様化は、感染症のリスクを高める要因であると考えられる。なお、日本における在日ベトナム人の人口は令和6年末時点で約63万人と国内第2位を占める。ベトナムには生の豚肉を含む伝統的な食文化があり、有鉤条虫などの感染リスクを伴う可能性がある。こうした背景からも、患者の渡航先や故郷などをふまえた虫卵鑑別が今後さらに重要になると考えられる。

## 【まとめ】

渡航歴のある患者に対し、腹部超音波検査所見と糞便検査所見を組み合わせることで条虫の存在を証明し治療に寄与した一例を通じて、臨床検査技師の役割と検査の意義を確認できた。(連絡先-075-391-5811)

## 尿沈渣検査から診断に至った膀胱・腸瘻の一症例

◎伏見 祥広<sup>1)</sup>、梅垣 友里<sup>1)</sup>、森川 りの<sup>1)</sup>、藤本 裕子<sup>1)</sup>、角坂 芳彦<sup>1)</sup>、神田 晃<sup>1)</sup>  
関西医科大学附属病院<sup>1)</sup>

【はじめに】膀胱・腸瘻は膀胱と腸（大腸や小腸）とに交通ができる疾患である。原因として憩室炎や大腸癌、クローン病などの腸疾患が多くを占めている。今回我々は、大腸癌による膀胱・腸瘻が尿沈渣検査から早期診断・治療に至った症例について報告する。

【症例】30代女性。現病歴：大腸癌 化学療法中。前日より腹痛があり、来院された。

【検査所見】来院時血液検査：WBC 7,500/μL、Hb 8.7 g/dL、PLT 17.7×10<sup>4</sup>/μL。生化学検査：TP 6.0 g/dL、Alb 3.3 g/dL、CRP 8.676 mg/dL。尿定性検査：尿色調 赤色、尿外観 浮遊物を認める混濁、比重 1.030 以上、WBC(3+)、URO(NORMAL)、PRO(2+)、pH 6.0、OB(3+)、KET(±)、BIL(-)、GLU(-)、NIT(-)、コメント：肉眼的血尿、浮遊物。

尿沈渣検査では赤血球 100~/HPF、白血球 100~/HPF、細菌(3+)であり、糞便成分を認めた。検体性状と沈渣像より膀胱・腸瘻を疑い、尿沈渣にて異型細胞を検索するもみつからず。カルテよりエピソード確認を行い、採尿コップの外観確認を行った。コップ外観からコンタミネーションで

はなく、膀胱・腸瘻による糞尿であると判断した。

【経過】主治医へ患者エピソードと尿一般検査で糞尿が認められたことから膀胱・腸瘻が疑われることを電話報告し、追加検査としてCT検査を提案した。同日CT検査を行い、『腫瘍浸潤による結腸-膀胱瘻とそれに伴う膿瘍形成』が診断された。人工肛門造設術のため、再診日より緊急入院となった。

【結語】尿沈渣検査にて糞便成分の混入を認めた際、男性の場合は解剖学的な点からコンタミネーションの可能性は低く、膀胱と腸に交通が生じている可能性を考慮し易い。しかし、女性や乳幼児では採尿時のコンタミネーションを疑うことが多い。また、本症例のように尿沈渣検査にて異型細胞が認められない際は判断に苦慮すると考えられる。尿沈渣検査にて尿に糞便成分の混入を認めた場合は、膀胱・腸瘻の可能性も考慮し、患者背景の確認や尿コップ外観の確認を実施したうえで主治医へ報告することが重要である。

連絡先：072-804-0101

## エチレングリコール中毒の一例

◎東條 美紗<sup>1)</sup>、竹田 有沙<sup>1)</sup>、一杉 正仁<sup>1)</sup>  
滋賀医科大学法医学部門<sup>1)</sup>

## 【はじめに】

エチレングリコールは無色透明の液体で甘味があり、事件・事故（誤飲）・自殺で服用されることがある。用途は多岐にわたり、特に不凍液には高濃度に含まれるため、服用した場合には注意が必要である。

今回、エチレングリコール中毒で死亡した症例を経験したので、報告する。

## 【症例の概要】

50歳代の男性。ホテル室内で倒れているところを発見された（不搬送）。トイレには緑色の嘔吐物、室内には緑色の液体が入ったペットボトルが発見された。

## 【解剖結果】

- ・臓器所見：咽喉頭から十二指腸まで、粘膜のびらん、発赤、出血を認めた。
- ・消化器内容物：胃から上行結腸の内容物から、エチレングリコールが検出された。血液、尿からも検出された。
- ・尿検査：細長い六角形とひし形のシュウ酸カルシウム結晶を認めた。

・病理組織学的検査：腎臓の尿細管腔に、シュウ酸カルシウム結晶を認めた。

## 【考察】

過去、本邦で報告されたエチレングリコールの服用例は、「男性」、「自殺」、「不凍液の服用」が多かったが、その実数は明らかではない。

今回の症例は、解剖結果より、死因は「エチレングリコール中毒（自殺）」とした。服用からの時間経過、尿中の結晶について、文献を踏まえて考察したい。

## 【まとめ】

エチレングリコール中毒は稀な症例とされている。しかし、身近な物に含まれていることによる小児や高齢者などの誤飲、また昨今、エチレングリコールを使用した事件も起きているため、同様の症例が増加する可能性がある。迅速かつ正確な検査結果が、早期の診断と迅速な治療に繋がると考える。

滋賀医科大学 077-548-2111（代表）

## 尿沈渣にてST合剤由来の薬物結晶を検出した1例

◎内田 大貴<sup>1)</sup>、浅井 雛子<sup>1)</sup>、平松 和大<sup>1)</sup>  
公立学校共済組合 近畿中央病院 臨床検査科<sup>1)</sup>

【はじめに】ST合剤はサルファ剤であるスルファメトキサゾールとトリメトプリムを配合した薬剤でこれらからなる薬物結晶は文献的な報告の少ない希少な成分である。

今回我々はST合剤を使用した患者尿において薬物結晶を認めた症例を経験したので報告する。

【症例】80歳代 女性

【現病歴】他院にてORIF(open and internal fixation)(観血的整復固定術)を実施。術後加療中に、創部からの出血及び尿意の減退、発熱や咳嗽を自覚。誤嚥性肺炎、尿閉、創部感染が疑われ当院紹介となった。入院4病日、創部からの培養結果より耐性菌を含めた複数菌種が(*Escherichia coli*, *MRSA*, *Clostridium perfringens*)検出されたため薬剤感受性パターンを参考に朝晩2錠(4錠/Day)の内服でST合剤が処方された。

【尿検査所見】比重 1.016 pH6.0 潜血(±) 蛋白(-) 糖(-) ウロビリノーゲン(Normal) 白血球(3+) 亜硝酸塩(-)  
赤血球 1-4/HPF 白血球 50-99/HPF 細菌(2+) 真菌(3+)

コメント：輝細胞 薬物結晶疑い

【結晶の所見】無色で中型から大型の結晶が見られた。形態は長方形、菱形、岩石様の不定形、短冊様、板状などの多彩な形態を示した。表面にはコレステロール結晶様の幾何学的模様を認めるものも散見された。

【結晶の性状】10%KOHに速やかに溶解し、アセトンで非常に緩徐に溶解した。赤外線分析ではスルファメトキサゾールの最終代謝産物であるN-アセチルスルファメトキサゾールと類似したIRパターンが得られた。

【考察・まとめ】形態学的所見、結晶溶解試験の結果、薬剤使用歴、赤外線分析の結果から結晶成分はST合剤に由来する薬物結晶であったと結論付けた。本成分は形態学的所見のみでの報告は困難であると思われるが多彩な出現パターンが推定の一助になると思われる。

連絡先：0727-81-3712 内線 (651)

## 尿沈渣に出現し組織型推定に苦慮した亜型尿路上皮癌の1例

◎内田 大貴<sup>1)</sup>、川村 道広<sup>1)</sup>、香取 千晶<sup>1)</sup>、浅井 雛子<sup>1)</sup>、平松 和大<sup>1)</sup>、藤井 智美<sup>2)</sup>  
 公立学校共済組合 近畿中央病院 臨床検査科<sup>1)</sup>、大阪大学大学院医学系研究科病態病理学講座<sup>2)</sup>

【はじめに】尿中に見られる異型細胞のほとんどの組織型は尿路上皮癌だが、尿路上皮癌であるにもかかわらず病理組織学的に尿路上皮癌とは異なる形態的特徴を有するものを『尿路上皮癌の組織学的亜型(Histological subtype)』などと表現する。これらは多彩な形態像を示すため形態学的検査での鑑別は一部を除き困難とされている。今回我々は、尿中に異型細胞を認め、組織型鑑別に苦慮した亜型尿路上皮癌の症例を経験したので報告する。

【症例】80歳代 男性

【現病歴】頻尿を主訴に近医受診。近医での尿細胞診にて「ClassIII Atypical cells」(詳細不明)、膀胱鏡では明らかな悪性所見は認めなかった。腹部エコーにて左腎嚢胞を指摘。造影CTにて左上部尿管狭窄および尿管壁肥厚を認めたため尿管癌疑いにて当院紹介となった。

【尿定性・沈査所見】比重：1.023 pH：5.5 潜血：1+ 蛋白：±  
 尿糖：－ 白血球：2+ ケトン体：2+  
 赤血球：<1/HPF(isomorphic) 白血球：5-9/HPF 上皮類：<1/HPF  
 細菌：－ コメント：細胞集塊 異型細胞

異型細胞は楔状や球状の集塊で見られた。細胞質はざらつきが見られ、核は小型でN/C比は低く総合的な核異型は軽微だった。核は偏在傾向で、核小体腫大や核の突出像が目立った。

【細胞診断】ClassV Urothelial carcinoma

【組織診断】Urothelial carcinoma, micropapillary subtype

【考察・まとめ】本症例のMicropapillary subtypeは画像検査で指摘することが困難であることから精査のきっかけとして形態検査が重要である、またMicropapillary subtypeは亜型尿路上皮癌の中でも極めて高悪性度に分類されるため、形態検査での早期発見は患者予後に直結すると考える。精度向上のため尿沈渣で得られた疑問や違和感は担当医だけでなく細胞診担当者と積極的に共有すべきである。組織型推定は細胞質の表面構造を詳細に確認することが特に重要であると考ええる。

連絡先：0727-81-3712 内線 (651)

## 便中に虫卵を認めた肝蛭症の一症例

◎宮西 克弥<sup>1)</sup>、矢野 剛<sup>1)</sup>、長谷川 健太<sup>1)</sup>、井戸向 昌哉<sup>1)</sup>、松岡 徳登<sup>1)</sup>  
日本赤十字社和歌山医療センター<sup>1)</sup>

【はじめに】肝蛭はウシやヒツジなどの胆管内に寄生する寄生虫で、ヒトにも寄生する人畜共通感染症である。日本国内の患者発生数は年間0～6例程度であり、和歌山県でのヒトへの感染例は我々が調べた限り今回が初めてである。また、虫卵や虫体が検出されることがまれであるため、診断に時間を要する感染症とされる。今回患者便中に肝蛭卵を認めた症例を経験したので報告する。

【症例】30歳代男性。間欠的な心窩部痛を主訴に当院を受診。好酸球増加と肝S6の腫瘍性病変が指摘された。さらに問診から山菜やジビエの食歴が判明し、寄生虫感染症が疑われ、便検査と寄生虫抗体スクリーニング検査が提出された。

【検査所見】WBC 5700/ $\mu$ L、白血球分類にて好酸球 20.7%と増加を認めた。提出された便の性状は普通便。便直接塗抹標本で長径約 170  $\mu$ mの巨大な肝蛭卵を極少数認めた。集卵法（ホルマリン・エーテル法）を実施したが虫卵は検出されなかった。同時に提出された寄生虫抗体スクリーニング検査は肝蛭 2+であった。後日行われた免疫診断によって

肝蛭特異抗体が陽性となり、肝蛭症の確定診断となった。

【経過】肝蛭症の治療薬はトリクラベンダゾールが第一選択であるが、国内未承認であり、臨床研究に参加する形で治療が行われた。3か月後の検査結果で好酸球の減少と症状の改善が認められた。また、便検査で虫卵は認められなかった。

【考察】肝蛭はウシやヒツジ、シカなどの反芻動物が終宿主であり、家畜への感染が問題となる。ヒトはメタセルカリアの付着した食用の水生植物を経口摂取することで感染する。また、虫体が潜む肝臓の生食でも感染する可能性がある。本症例では山菜やジビエの摂取歴は確認できたが、感染源の特定はできていない。今回、初診時の便検体から虫卵を検出することができたため、治療方針の速やかな決定に貢献できたと考ええる。

【結語】近年、日本国内において寄生虫感染症はまれな疾患となっており、症例を経験することが少なくなっている。今回、肝蛭症を経験したことで、寄生虫感染症の知識向上と医師との連携の重要性を再認識した。